

路遥作品集

訳・安本実

中国書店

受了很大的精神创伤。亏得这三年教书，对他喜爱的文科深入钻研。他最近在地区钻苦熬的结果。现在这一切都结束了，他有认真地在土地上劳动过，但他是农民的民啊，他们那全部伟大的艰辛他都一清二白。从来都没有当农民的精神准备！不必隐瞒，儿子当土地的主人（或者按他的另一种说法来说还是充满希望的。几年以后，通过考力，争取做他认为更好的工作。可是现在在这里，脸在被角下面痛苦地抽搐着，一只

对于高玉德老两口子来说，今晚上这不疼自己的独生子：他从小娇生惯养，没受呀！再说，加林这几年教书，挣的全劳力不教书了，又急忙不习惯劳动，他们往后只靠四只手在地里刨挖，也能供养儿子上又恐慌。加林他妈在无声地啜泣；他爸虽半天，开始自言自语叫起苦来：“明楼啊，大队书记，什么不讲理的事你都敢做嘛！你息好意思整造我的娃娃哩？你不要理了总有一天要睁眼呀！可怜我那苦命的娃娃来，两行浑浊的老泪在皱纹脸上淌下来，

高加林听见他父母亲哭，猛地从铺盖上说：“你们哭什么！我豁出这条命也要和这一下子慌坏了高玉德。他一脚片子把小脚绕过来，脊背抵在门框上。老两口

高加林急躁地对慌了手脚的两个老人说他！妈，你去把书桌里的钢笔拿来！”恐慌。他死死按着儿子的光胳膊，夹告他人家通天着哩！公社是上、都踩得地皮响我老了，争不行这口气了；你还嫩，招架做这事啊……”

他妈也过来扯着他的另一条光胳膊，接爸说得对对的！高明楼心眼子不对，你告

加繁重的体力劳动，又有时间继续学习，表过两篇诗歌和散文。是这段时间苦父亲一样开始自。虽然没在这贫瘠的山区么，农从来也没鄙视过任何一个人，但他自己拼命读书，就是为了不像他父亲一样一辈。然这几年当民办教师，但这个职业对他会转为正式的国家教师。到那时，他再努的幻想和希望彻底破灭了。此刻，他躺在自己的头发。

象谁在他们的头上敲了一棍。他们首先心改肉肉的，往后漫长的艰苦劳动怎能熬下去一家三口的日子过得并不紧巴。要是儿子不好过。他们老两口都老了，再不像往年，想到所有这些可怕的后果，他们又难受，看起来比哭还难受。老汉手把赤脚片摸了！你能过分了！你弗过分了！仗你当个教了三年书，你三星今年才高中毕业嘛！要了？明楼！你做这事伤天理哩！老天爷黑黑……”高玉德老汉终于忍不住哭出声上那一撮白胡子中间

只眼睛里闪着怕人的凶光。他对父母吼叫：“你们！”说罢他便一纵身跳下炕来。随着儿子的光胳膊。同时，他妈也颠着儿子堵在了脚地当中。

我并不是要去杀人嘛！我要写状子告儿子说这话，比看见儿子操起家具行凶还小老子哩！你可千万不要闯这乱子呀！除什么事也不顶，往后可把咱扣掐死呀！打击报复。你可千万不能

也夹告他说：“好我的娃娃哩，你人往后就没活路了……”

FREE

路遥作品集 目次

姉 3

月下 27

困難な日々になりにて 45

人生 161

痛苦 471

訳者あとがき 491



月下

大隊書記高明楼^①の娘、蘭蘭^{カオミシロー ランラン}が間もなく嫁ぐ。事情通の人がふと漏らして言うには、おやじの探^②しだした婿殿は地区商業局の運転手で、その父親は地区商業局の局長らしい。おまけにこの局長様は裏から手を回し、すでに蘭蘭のために町での正式な仕事を見つけているともいう。

この日の午後、その風聞は実証された。果たして地区商業局の一台のトラックが書記の門前の簡易自動車道に止まり、モダンな身なりの一人の若者が高明楼の高い塀に囲まれた広い庭に入ってしまったのだった。更にある人は高明楼が二、三キロ離れた町まで行つて棒状にさばいた上等の肉をぶら下げて戻ってきたのを見た。多分新しい娘婿もてなすものだろう。花嫁、花婿はもう結婚手続きも終えており、蘭蘭は明日の早朝には婿殿と村を離れるということだった。

この件に対する村人たちの反応は冷やかかなものだった。人々はただ腹立たしげに、ええ事はみんな人さんのもので、わしらただのどん百姓には夢にだって見られやせん、と言うだけだった。

だが、彼の娘、蘭蘭への人々の印象は違っていた。高蘭蘭^{カオランラン}は高校を卒業して二年、二回大学を受験したがいずれも受からなかった。それに、この頃では国は農村で労働者や職員の募集を

しなくなっていたので、彼女は生産隊^③で野良仕事に加わるほかなかった。この娘はきれいで賢く、道理もわきまえていて物言いも穏やかだった。世代が上の人でありさえすれば、たとえ貧しくて人前に立てないような人にも、彼女はいつもおじさん、おばさんと呼びかけるのだった。更に時には、幾人かの貧しくて蓄えのない人の差し迫った問題を解決することもできた。誰かの家の子が急病になつて緊急に金が必要の時、高書記に頼めば断られるのが落ちだったが、蘭蘭に言えば、決まつてあれこれ言わずにすぐにでも家からお金を持ち出してきてくれた。今、彼女がこの村を離れると聞いて、人々はいささかがっかりしてしまった。

日が暮れてもうすっかり暗くなった。村の家々とは谷筋一つ隔てた高書記の大きな家には灯りが輝いていたが、そのほかの農民たちの家々は多くは暗いままだった。月明かりの下、村の前を通る自動車路が白くまばゆく浮きあがつて遠く川下へと伸びている。うねうねと続く大きな山のシルエットが深い藍色の夜空にたくさんの美しい曲線を描いている。村の向かいの果樹園はすでに幾つかの丸い固まりにぼやけ、一枚の薄いサラサで覆われているかのようだった。一日中働いた社員^④たちはいつもの様にオンドルに横たわるとすぐに眠りに落ちていた。

しかし、ただ一人、村の奥まった所に住む目の見えない女やもめの一粒種^{タニイユ}の大牛^{ダイウ}だけはどうにも眠れず、なんと生まれて初めての不眠症に陥っていた。このがむしやらに働く農夫は、これまで頭を枕に着ければ疲れてたちまちイビキをかき、世の中に眠れない人がいようとはまるっきり信じられなかったのだが、しかし、今夜は違っていた。

どんな大事がこの愚直な大牛を眠れなくさせてしまったのだろうか。もちろん何か喜び事があったからではない。今まさに大きな苦痛が彼の心をさいなんでいるのだった。ほかでもなく、蘭蘭が明日には村を離れるためだった。もとより彼の苦悩は誰も知らず、ただ彼一人の心に秘められたものだった。

大牛は子牛のようにたくましいが、生まれつき頭が鈍かった。普段は物も言わずにただ仕事をするだけで、たとえゲンコツを二、三発食らつても気の利いた言葉の一つも吐くことはできなかった。彼は小学校に一年通つただけで、どうにか自分の名前と労働点数簿⁽⁵⁾の数字が分かるだけだった。暮し向きは貧しく、染めもしていない粗い目の白い木綿服をいつも身にまとい、それも柴や草の汁、牛のフンなどでひどく汚れたままだった。彼は終日浮かぬ顔をしており、どんなに面白い話で彼を笑わそうとしても無駄だった。村人たちは普段彼を大事に扱うことはなかったが、村一番のその力と善良な心根は大切にしていた。きつい仕事のために、生産隊の方で人の割り振りに困る時でも、彼はいつも一言の文句も言わずにそれをやりに出かけた。村の誰かの家で急な使い走りの用事ができた時にもいつも彼に頼んだ。彼は誠実、着実にこなし、また、どんな見返りも一度も口にしたことはなかったからだった。

言うなれば、彼の巡り合わせは本当に辛いものだった。元気に飛び跳ねながら学校に通いはじめたばかりの頃に、父親が病気で倒れて仕方なく退学し、ほんの幼くして家庭という重荷をその肩に背負いこむことになってしまった。数年後には父親が死に、川原ほどの大きな負債が

残された。その後、国の政策は何度も変わり、やがて生産隊も崩壊状態となって分配もごく少なく、今にいたるまで彼は負債を返しきれないでいた。

父親の死後、続いて今度は母親が両目の光を失った。彼の暮らしは雪の上に霜が降るようなものでますますひどくなった。毎日、山に出て野良仕事をし、帰れば帰ったで家のやり繰りに忙しく、日々の暮らしはまったくズタズタだった。母親は目が見えないので針仕事もできず、彼はボロ服や薄物を適当に着て過ごした。履き物もともすれば獅子のような口を開けたが、隣近所に頼んで幾針か縫ってもらうしかなかった。彼はもうすぐ二十も半ばを過ぎるのだが仲人が彼の家にその足跡をしるすことはなかった。村人たちは、大牛は一生男やもめで過ごすばかりあるまいと見ていた。この頃ではこの山深い谷あいの農夫が嫁を迎えようとすれば、暮らし向きのましな家でも少なくとも六、七百元の結納が要った。大牛のような素寒貧の家には、仮に千数百元をそろえたとしても訪ねてくる仲人はいなかった。村人たちは時々からかい半分に尋ねる。「大牛、嫁が欲しくないかね？」大牛はそんなからかいには聞こえない振りをして多くは返事をしなかったが、時には低く野太い声で、「わしゃあ、欲しいが、相手がわしを要らんのじゃ」と答えてみんなに大笑いされてしまうのだった。

だが、誰一人知らなかったのだ。大牛が言ったことは本当の気持ちだった。身のほど知らずの大牛はいつの頃からかは分からないが、なんと書記の娘、蘭蘭をひそかに愛してしまっていた。それこそ本当に大きな悲劇だった。むろん、どんな角度から見ても痴人の見る夢でしかな

かった。しかし、どんな人間であれ、往々にしてこうした状況はあり得るだろう。自分でもあきらかに不可能と分かっているながら分不相応な思いを抱き、しかも、死ぬほどにそれにとらわれるのだ。

実際のところ、そのことは大牛自身にもはっきり分かっていた。自分が高蘭蘭と結ばれたいと願うことは天上の仙女と結ばれたいと願うように不可能に等しいことを。しかし、それにしても、彼はまたどれほど深く彼女を愛してしまっていたことか。高蘭蘭が笑いさえすれば彼はこの世の中すべてが笑っていると感じたし、高蘭蘭が悩めば山や川もたちどころにその輝きを失って見えるのだった。

蘭蘭が⑥県城の高校に学んでいた頃、冬休みや夏休み、彼女が村に戻れば大牛はたちまち道もサツサと歩き、話や言葉の調子もはつきりとなり、その上、ともするとあの牛のフンのこびりついた木綿服を洗ったりした。学校が始まって高蘭蘭が県城に行くと、気持ちのたかぶっていた大牛はたちどころに霜に打たれた作物のようにしよんぼりうなだれ、少しの生気もなくなつた。残念なことに、これまでの大牛なりのそんなひそやかな愛情表現は、世界の誰もその綾あやを見てとることはできなかった。ましてや、高蘭蘭はまったく気づきもしなかった。

とうとう蘭蘭が高校を卒業して帰ってきた。大学には受からず、村に戻るしかなかったのだ。父親は彼女を野良仕事に参加させまいとしたが、彼女は生まれつきしっかりした娘で、家にじっとしたまま、働きもせずに無駄飯を食べるつもりなどなかった。

蘭蘭が生産隊の労働に参加するようになると、大牛は嬉しくてたまらず、まるで本当に少し頭がおかしくなったみたいだった。言葉も普段より多くなり、しかも人のいない所では調子っぱずれながら芝居の一節を口ずさみさえした。

大牛はなにかと蘭蘭と一緒に仕事をしようとし、いつも彼女のために骨を折ろうとした。何か請負の仕事があるたびに、彼は言葉もしどろもどろに彼女を野原に遊びに行かせ、彼女の仕事分は自分が代りにやった。蘭蘭も彼に優しかった。いつも親しげに「牛お兄さんニウお兄さん」と呼んだ。誰かが話の端々に彼のことをこけにする時、きまって彼のことをかばった。また彼女は彼には気兼ねしなかった。道すがらどこか崖にきれいな野の花を見つけると彼女は、「牛お兄さん、早くあの花を採ってきて！」と叫ぶ。彼は、兵士が突撃ラッパを聞いたように一目散に崖がけを駆けあがっていく——危険を冒して蘭蘭のために一輪の花を摘むことはおろか、たとえ天に昇って星のひとつかけらを摘むような言われても彼はそうしようとしたことだろう。

ある時、彼は、はだしてイバラの群生する崖に上り、彼女に真っ赤なヒメユリを摘んだことがあった。下りる時不用意にトゲを踏みつけ、痛さに片足を引きずって歩いた。

蘭蘭は気づくとすぐさま彼を座らせた。彼女は身につけていた刺繡針ししゅうを素早く取りだして彼の前にひざまずくと、暖かい、少女の手で泥や牛のフンのこびり付いた彼の足を抱きかかえ、土踏まずに刺さったトゲを注意深く取り除いた。思いもかけない蘭蘭の厚意に彼は思わず鼻の奥がむずがゆくなり、感激のあまりほとんど泣き出さんばかりになった。

それ以後、彼は野良に一人いる時などよくぼんやりとその足を眺めた。得も言われぬ一種のぬくもりが永遠にその足に宿っているように感じるのだった。彼は自分のこの生涯にこれ以上の幸福を得ようとは決して望んではいなかったし、ましてや仙女のような蘭蘭に、自分が彼女を愛するように自分を愛して欲しいとも思いはしなかった。彼はただ、自分の目の範囲に彼女がいつづけてくれることを願うだけだった。だからこそ、彼は蘭蘭が帰郷して農作業をすることとずっと有頂天だったのだ。彼女が太陽なら、彼は一つの山、一筋の川でありたかった。一方は天上にあり、他方は地上にあっても、彼女のあの暖かな輝きを浴びることができたのだ。だが、これら一切が今にも失われようとしている。愛しい高蘭蘭は明日早くには村を離れてしまう。裕福で、地位もある町の青年と町へ暮らしに行くのだ。

この時、彼は眠れぬまま粗末なオンドルに横たわり、苦しんでいた。明朝早く、空の太陽が東から昇る頃になれば、彼の心の太陽はすでに永遠に落ちてしまっているだろう。そう、永遠に落ちてしまうのだ。

銀色に輝く月明かりが窓の破れ紙の穴から差しこみ、大牛のささくれた赤黒い顔一面の涙の痕を照らしだしている。

重々しいため息一つ、彼は跳ね起き、そそくさと服を着るとオンドルを飛びおりた。ドアを開けるや、あたふたと村の入り口の、あの灯かり輝く一軒家の庭へと向かった。

見事な月明かりだった。水銀が地上に振りまかれたようにあたり一面きらめいている。冷気が川筋から立ちこめ、村の路地も冷えびえとしている。

大牛は月明かりを浴びて歩いている。ツルツルの坊主頭、むき出しの肩、袖無しそでの粗末な一重の木綿をはおり、愚直そうな顔にはこれまでになかったたかぶりの表情が浮かんでいる。彼は蘭蘭に会おうと決めていた。そうすることがいいかどうか、行つて何を言い、何をしようとするのかまるで考えてもいなかった。とにかく、今夜一目彼女に会わねばと必死だったのだ。彼は、遠く蘭蘭の家の下の道に止まっているトラックを見ると、心は猫の爪つめで掻きむしられるようにいら立った。

彼は書記の家の新しく建てられた豪勢な門の前で止まると、紅いペンキで塗られた門扉を強からず弱からず何度かこぶしで叩いた。

しばらくして誰かが大門のくぐり戸を開けにきた。書記の女房だった。彼女はいぶかしげな表情で何の用事かと尋ねた。「蘭蘭に来るよう言ってくれ、ちょっと用がある」。彼はそう答えた。

書記の女房は戻っていった。彼はドキドキしていた。門を離れ、また簡易道路に戻ると傍らの大きな槐えんじゆの樹の下に立った。両の目はくぐり戸をじつと見つめている。

間もなく、蘭蘭が出てきた。月明かりの中、喜びにあふれた華やいだ様子が見て取れる。今までの二本の短いお下げは前髪をそろえたショートカットに梳すかれ、いかにもしとやかで落ち

着いて見える。上下おそろいの淡い色合いのツーピースがスラリとした体を包み、その姿は県の劇団の俳優のように優雅だった。彼女は周囲を見回して槐の下にたたずむ大牛を見つけると嬉しそうに呼びかけた。「牛お兄さん、何か用事？ 家の中でお話して」

「いや、俺……行かんよ。蘭蘭が……来てくれ」。彼は槐の下に立ったまま、みぞおち辺りが熱くなるのを感じながら口ごもりつつ言った。

蘭蘭は軽やかな足どりで槐の樹の下まで来た。喜びあふれる顔にやや怪訝^{けげん}な表情を浮かべ、この幼い頃から共に遊んで育った農夫を見ながらも一度尋ねた。「牛お兄さん、一体どんな用事？」

「いや……べ、べつに」。大牛はせつぱ詰まったように片手で一方の手をこすりながら、唇をかみ締めた。体はかすかに震えている。

「何かあるんだったらなんでも言つて、牛お兄さん。もう、知っているでしようけど、私……明日行くわ」。蘭蘭は恥ずかしそうに顔をそらした。花嫁特有のはにかむような笑みをかすかに浮かべ、月明かりにぼんやりと浮かびあがる向かいの果樹園を眺めている。

彼はどもりながらもついに口を開いた。「蘭、蘭蘭……な、なんでわしらの村を離れるんだ。蘭蘭……む、村を離れんでくれ」。そう言い終わるや、思わず口を突いて出たそのたわ言に自分自身飛びあがるほど驚いた。彼はいきなり背を向けると坊主頭を槐の幹に押しつけた。両手は激しく樹皮をかきむしっていた。

蘭蘭はあつ^け気にとられた。驚きのあまり口を開けたまましばらく閉じることができなかった。聡明な娘はこの言葉にどんな気持ちか込められているかすぐに理解した。彼女は苦痛に満ちた一つの心が自分の眼前で激しく脈打っているのを見た。彼女はなすすべもなく、このボロをまとい、坊主頭に肩むき出しの農夫を眺めた。一瞬、どうしていいか分からず、気分は重く沈んだ。ああ、人は一生のうちどんな事にでも出くわすものなのだ。

やがて、彼女は冷静さを取り戻した。憐れむようなまなざしで筋肉の盛りあがったその肩を見ながら、そっと、そして少しとがめるような口調で言った。「牛お兄さん、どうしてそんなこと言うの。そんなこと言わないで……」。彼女はフツとため息をつくと、心こもった優しい声で続けた。「牛お兄さん、私、今までもずっとあなたを尊敬してきたわ。本当よ。牛のように善良な心を持っているんですもの。まるで兄のようにいつでも、どこでも私を見守ってくれたわ。お兄さんのこと、私、一生忘れない。牛お兄さん、私、今、あなたの気持ちは分かったわ。だけど、それは無理なのよ。私、お兄さんにそんな風には考えて欲しくはないのよ。今度いつか村に帰ってきたら、やつぱり、実の兄に会うように会いたい……」

蘭蘭は静かに話し、大牛はぼんやりと聞いている。ひとひらの雲が皓^{こうこう}皓と輝く月をかすめ、大地はたちまち闇に沈む。村の下を流れる小川のせせらぎがサワサワと聞こえてくる。あたり一面静まりかえっている。

大牛の厚い両の唇は幾度か震え、やがて深い息を漏らして言った。「なんだかんだ言っ

も、農村は貧しく、農民は辛い……。蘭蘭、行けよ。町に行ったら絶対、くれぐれも気をつけてな。町は車が多いんだし、ぶつからんように気をつけてな……」

この時、上の方の庭から蘭蘭の母親の弾んだ声が聞こえてきた。「蘭や、早く帰って野菜を炒めとくれ、母さんは肉の千切りは終わっちゃったよ！」

蘭蘭はすぐには応じなかった。真っ白な歯は緋色の唇をかみ、やや首を垂れて足は軽く地面をまさぐっている。長いこと経って彼女はやっと口を開いた。「牛お兄さん、それじゃ私行くわ。これから何か急に入り用の物があつたら、私に手紙をちょうだいね。私、きつとことづけるから……。早くお帰りなさいな。夜も冷えてきたわ、風邪を引かないように気を付けてね。明日もまた野良に出なくちゃならないでしょう……」。彼女は顔を上げ、一瞬心こめて大牛を見た。

大牛は、蘭蘭が門のくぐり戸に消えるのを見届けたとたん、両足はブルツと震えてそのまま槐の樹の下に座りこんだ。彼は両手で坊主頭を抱えこみ、目には二つの炎を発しながら道路に止まっている「解放」マークのあの大型トラックを睨みつけている。

大牛はしばらく座りこんでいたが、やにわに立ちあがった。道路傍らの溝から無造作に大きな石をほじくり出すと唇をかみ締め、そのまま小走りに走って「ガッシャン」とばかりにそのトラックに投げつけた。まるで怒り狂った子牛のように、腹一杯の苦悶は晴らすすべとてな

く、そのトラックに向かってドン・キホーテ式の進撃を開始したのだった。彼はこのいまましいトラックを憎んだ。彼の大切な、愛しい蘭蘭を連れ去ろうとしているのだ。

彼が二つ目の石を投げようとした時、道路そばの門が突然開いた。焼酎で少し顔を赤らめた高明楼が月明かりの下、大声で怒鳴りつけた。「ええッ、どこのろくでなしじゃ？」トラックのそばに立っているのが大牛だと分かると、不思議そうに尋ねた。「おまえは夜の夜中にここを何をやっとるんじゃ？」

大牛は高明楼と見ると、両腕を胸に組み、荒い息を幾つか吐いた。「何をやっとるんじゃ、だと？ このろくでなしのトラックをぶっ壊すんじやい！」

高明楼はこの訳の分からない話をじっと考えた。この若造め、多分貧乏暮らしにせっぱ詰まったあげく、人様のめでた話に付けこんでわざと難癖なんくせを付けにきたのだと思った。彼は世故に長けた男だった。素早く前に進み出ると、指導者兼年長者かみの口ぶりで言った。「牛よ、何かあるんだったらわしに言えよ。どうして夜の夜中にお上の車をぶっ壊していいんじや？ おまえは今までええ子じゃった。家でまた鍋のふたを開けられなくなったのか？ 心配要らん。救済食料がもうすぐ来る。もし、ここ二、三日何も食べるもんがないのなら、明日の昼にでもわしの家に来て幾らか持ってゆけよ」

「俺は、たとえ腹が減って牛のクソを食ろうても、おまえの物は食わん。おまえは今までさんざんうまい汁吸っておいて、今度は自分の娘さえほっぽり出しおった」。普段はおとなしく

口下手な大牛だったが、この時は顔を真っ赤にし、目は人も恐れるような凶暴な光を放つていても相手と殴り合える構えでいた。

高明楼は今になってもなお一体何事が起きているのか理解できなかった。しかし、この男が今、自分を激しく憎んでいることだけは分かった。

怒りが不意に書記の胸に込みあげたが、抑えた。つかみかかってもこの無鉄砲な若造にはかなわない。道理を説くにしても話すほどの道理もない。何よりもこの若造が一体全体なぜ今夜に限って突つかかってくるのか分からないのだ。まったく、慶事に疫病神とはこのことだ。

明楼はうまい手を思いつけないまま、仕方なく再び下手に出てこの訳の分からないゴタゴタを収めようとした。

彼は努めて穏やかに笑いながら言った。「なあ、牛坊よ、わしのどんなところが悪かったんじゃ？ わしが書記だということはさておき、おまえの死んだおやじの顔に免じてでも、わしはおまえの力になってやらなくちやいかんのじゃ。ああ、わしとおまえの親父はな、昔一緒にわしらんとこの地主の劉国璋^{リウクオヤン}の所で常雇いの作男をしていたし、それに土地改革や悪徳地主との闘いも一緒にやった。わしら二人は実の兄弟のように親しかったんじゃ。きょう日^びの政策では階級区分⁽⁸⁾ということは言うちやいかんが、それでもわしには、親しいわしらの、愛しいわしらの貧農下層中農⁽⁹⁾、^{うかが}というもんよ」。彼はしゃべりながら目の前のこのたった一人の聴衆にどんな反応があるか窺^{うかが}っていた。

大牛は唇を震わせていたが、憎々しげに口を開いた。「アホらしい。親しいじゃと、愛しいじゃと?……」。そう言いながらすでに自分を制御できなくなった大牛は再び石を拾いあげるとトラックに投げつけた。「ガッシャン」と音がしてガラスの破片が飛び散り、その一片が高明楼には当たらず、大牛の坊主頭に一筋の傷口を作った。

「このガキめ、やりたい放題やりおつて!」高明楼は叫びながら自分の家のくぐり戸に駆けこもうとした。

ちょうどその時、蘭蘭が彼らの前に現れた。

蘭蘭の蒼白の顔には、まるで一錠の苦い薬を飲んだばかりのような、言葉にならない悲哀が漂っていた。彼女は、父親に家に戻り、自分一人で大牛をなだめさせてくれると言った。高明楼は、凶暴な牛のようにいきり立っていた大牛がなにか間違いをしでかした子供のように、たちまちおとなしくなって蘭蘭の眼前に立っているのを目にした。この場のもめごとをなるべく早く収めるために彼はひとまず家に戻っていった。

大牛はずっと蘭蘭の前に立って頭を垂れ、手を何度ともみ合わせている。頭の傷口からは血が流れていたが、彼はぬぐいもしなかった。

蘭蘭は「アッ」と声を上げ、再び家に駆け戻った。やがて真新しい真っ白な手ぬぐいを持って飛びだしてくると、素早く大牛の坊主頭の傷口に巻きつけた。そして、涙ぐみながらそううと言った。「私の牛お兄さん……こんなことしないで。こんなことしたら人様に笑われるわ。」

私、今夜結婚したのよ。お兄さんがこんなに騒ぎ立てることは私の顔にツバを吐くようなものなのよ。牛お兄さん、お兄さんは小さい頃からいつも私を助け、私を守ってくれたわ。たとえこれから先一生私を罵るにしても、お願いよ、今夜は私の顔を立てて、もう一度私のことを助けようだい……」

涙がポタポタと大牛の愚直な顔を伝った。彼は口の中で「うん」と答えると、いきなり手ぬぐいを巻いた坊主頭を抱えこみ、そのまましゃがみこんで声もなくすすり泣きはじめた……。

間もなく、村の人たちは、あまり物言わなかった大牛が突然正真正銘の啞者^{あしや}となつて一言も話さなくなったことに気づいた。更にある人は、月夜になると雪のように真新しく、血の痕^{あと}の滲んだ手ぬぐいをその坊主頭に巻きつけた大牛が村の前を通る自動車道や道路下の川原を行きつ戻りつしながら、時としていきなり石を拾いあげるや「バシッ」と地上に叩きつける姿を見る、という……。

(1) 【大隊】生産大隊のこと。生産大隊は人民公社三級所有制下の人民公社と生産隊の中間に位置するが、生産管理や購買・販売、福祉事業等々を行う人民公社の根幹をなす管理機構。

(2) 【地区】省と県の間に設けられた行政区画単位。幾つかの県を管轄区域とし、省政府の直接的出先機関である行政公署が置かれる。

(3)【生産隊】人民公社制下の末端の組織。共同労働を行う基本組織で、その生産成果を分配する独立採算制をとる経済単位であり、同時に最も核となる村落的地域社会を形成する。

(4)【社員】人民公社の社員で、ここでは一般農民たちのこと。

(5)【労働点数簿】集団営農方式の下で、生産隊においてその労働力を個人ごとに数値化して分配の基礎としたもの。労働の軽重、技術の高低、作業の質等で一日の労働量を、多くは十点満点で数値化した。労働点数簿はそれを記録した帳簿。

(6)【県城】原文は「県城」。県政府の所在地。いわば政府末端の行政単位で郷や鎮にその支所を置くこともあった。人民公社化の後、県の下に基層行政組織としての幾つかの人民公社が置かれた。古くは城郭をめぐらしていた。地方の農村地帯においては小都市とも言うべき位置を占める。日本の県とは異なる。

(7)【土地改革】土地が少数の地主に集中していた地主制度を解体し、耕作地を農民に再分配して自作農を創設すること。中国革命における社会改革の主要な部分。

(8)【階級区分】一九四九年の中華人民共和国建設の初期、その階級闘争理論に基づき行われた階級査定とも言うべきもので、農村では土地改革に際して農民たちが地主、富農、中農、貧農、雇農の五つに区分された。最も貧しい雇農と貧農が農村における革命勢力とされた。当然、雇農・地主は消滅したものの、例えば地主は元地主ということで長く独裁の対象とされた。こうした階級区分の徹底は農村共同体を極めていびつなものにしていたが、一九七九年には撤廃された。

(9)【貧農下層中農】一九六〇年代前半の「社会主義教育運動」の中で中農を富裕中農と下層中農の二つに分け、貧農と下層中農を結びつけて貧農下層中農とし、最も革命的な勢力とした。